

随筆



残雪期富士登山 第4章

琉球大学医学部附属病院 高気圧治療部
井上 治

第4章：高度差1,500mの富士山頂へ

登りは暑いとのことで長袖のキルティングと羊毛のズボンを履き、妻はウインドブレーカーの上下を着け、アタックザックの底にアイゼンを入れ、私にはクッキーや羊羹などの行動食とペットボトル4本と熱湯を入れてもらったテルモスを詰めた。2階からピッケルも持って降りると朝食代わりに作ってくれた海苔のおにぎりがテーブルに置いてあり、熱い御茶で食べ始めると「温かいうどんもどうぞ」と若い従業員にすすめられ、1人分のおにぎりはリュックに詰め込んで出発した。山の朝6時は明るく、今日中に登頂してそのまま下界に下りる人には、OLだったかのような小屋の奥さんが「早く出ないと遅いですよ」と急かしていたが、われわれは日が暮れるまでに帰ってくれば良かった。樹林帯の山道は残雪が多く、踏み跡をたどると八角堂があり、今日の登山の安全を祈願し、樹林帯を抜けて一汗かく頃にコンクリート作りの避難小屋があり、上を眺めると要塞のような赤黒い壁に護られながら瓦礫の尾根道が規則正しくジグザグに上っており、その彼方には7合目、8合目の小屋が幾つも連なっていた。昨年の夏には家族4人が同じ砂塵が舞う瓦礫の傾斜道を大勢の登山客と共に汗して登ったが、早月（5月）の空はあくまで青く涼しく、のしかかって来るような頂上付近まで遠望でき、10時間も寝た妻は快調だった。スパルラインの5合目から来たらしい4人の男の子らがハイペースで追い越していったが、30分も経たない内に全員が息を荒げて道ばたに



要塞のような壁に護られて尾根道がジグザグに上っている

座り込んでおり、ズック姿でピッケルも持っておらずここまでが限界だった。6合目小屋では木のベンチに座りながら「ポカリがいい」と言う妻に「塩分が無い御茶から飲んだ方がいい」とザックからペットボトルを取り出しているとスキーを背負った一団が登って来たので、「こんにちは」と一人一人に声をかけながら先に行ってもらった。登山道は狭く、やや急峻となり、瓦礫から岩盤が露出し、ところどころに残雪があったが足跡に合わせて登れば滑ることはなかった。7合目の赤い鳥居を下から見上げると目立ち、雪に足を取られないようその下をくぐると鳥居荘で、スノーボードを背負ったグループが休んでいたが、われわれが来るとベンチを開けて出発し始め、十字架のように2つ背負ってる屈強そうな若者が彼女を従えていたが、追いついた時には彼女が彼氏のリュックも背負っていた。小屋からは尾根を登る夏道の左に雪渓があり、傾斜も40度位でアイゼンなしで足跡をトレースして登っている連中もいて、われわれもピッケルを雪に刺しながら登り始めた。雪渓は途切れて夏道に戻り、3,000mの標識を越える頃は3時間を経過していたが、ベンチに座りながら私は栗入りの羊羹を頬張り、妻はチョコバーをかじりながら右手の吉田大沢の大雪渓をよく見るとスキーのシュプールが描かれ、数人のグループが急峻な斜面をピッケルを振るって直登していた。7合5勺の

小屋からアイゼンを着けて大沢に向かう本格派を後目にわれわれはピラミッドの傾斜角に刻まれたような夏道を登り始めたが、夏に家族で泊まった白雲荘が上方に見え、さらに本8合と大きく書かれた小屋があり、頂上の鳥居が顎を上げると小さく遠望された。小屋ごとに休んでいたがペースは順調で、8合5勺(3,400m)には4時間で着き、妻に「今、人が来てないから」と物陰で小用を勧めるも「したくないものはしたくない」と強情で「腎臓を痛めるぞ」と言って自分だけ済ませ「あと1時間だ」とお鉢巡り(頂上の火口縁を一周すること)をしたいので先を急いだ。半袖で登りたい位の陽気だったが空気は希薄となり、時折大きく吸い込んでも心拍数は上がり、妻は急にペースが落ち、残雪の登山道はさらに険しく10~20歩で息をついて立停るようになった。スキーやスノーボーを背負ったチームにも追い越され、頂上の鳥居が永遠のものと思われ、プロトレックの高度計ばかり見ていたが、最後の1時間を2時間半かけ登り6時間半で12時30分に雪深い鳥居の下をくぐることができた。夏は砂塵と横殴りの風雨で浅間神宮も分からなかったが、無事にここまで来れた事に感謝して手を合わせ、無人の小屋の前のベンチに座り、テルモスからまだ温かい湯を蓋のコップに注ぎ、ポタージュスープを作った。ガーリックトーストとは良く合い、海苔を巻いたおにぎりも冷んやりして食欲をそそり、百均で見つけた紙パッ

クのコーヒーだったが香り^{にが}と苦みが最高だった。とにかく最高所の剣ヶ峯に登りたく、シッコもしてくれたのでアイゼンを妻の登山靴にもしっかり着けてやり、締まった積雪の踏む感触を確かめながら噴火口を時計回りで歩き始めた。直ぐの所に露出した岩山のピークがあり、小さい鳥居も見えるが道は無く、変だと思ったが先ず直登してみるも何も書いてなく、妻もアイゼンをガチャガチャいわせて登ってきたが地図を見ると火口縁の反対側の大きなピークが剣ヶ峯で、富士測候所の建物も見え、急に私の信用が無くなってしまったと同時に「あんなとこ登るの危ないし、もう帰ろう」と妻が言い出した。「大丈夫だよ、(火口縁を)1周してくるから2時間ほど待っているか」と時計を見ながら顔を伺うと「先に下りてる」と言うので「下りが危ないのに1人で帰れる訳ないだろう」と諦めざる得なかった。少し時間に余裕ができたので火口縁の内側ぎりぎりまで近づくと、パツクリと巨大な口を開けた^{すりぼち}挿り鉢状の噴火口は雪で覆われているが無数の^{たてみぞ}縦溝があり、大小の瓦礫が真逆さまに落ちて行った^{こんせき}痕跡で、驚いたことに剣ヶ峯直下のスロープでスキーをやっている人もおり、もう少し火口に近づけば奈落の底だった。夏山では風雨の中で子供達に見せられなかったことを悔やみながら火口をバックに写真を撮ったりし、時間の経つのもパノラマで撮るのも忘れるほどだった。

(11月号へつづく)



最後の登りに苦しむ妻



巨大な口を開けた噴火口